

第14回「泉大津オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（優秀賞）】

ピンカチ

片木 威・大阪府泉南市

五十年前に神戸商船大学（現神戸大学海洋政策科学部）に入学した。商船の士官船員を養成する高等教育機関で、冬用と夏用の制服があった。商船大学の制服は、現在の海上自衛隊、海上保安庁、海運会社士官の制服とほぼ同じである。おそらく大日本帝国海軍の名残り、元を辿ればイギリス海軍の制服を手本にしたものであろう。冬用は濃紺のダブルのスーツ、ボタンは校章の金ボタン。濃紺のスラックス。夏用は白の詰襟、校章の金ボタン。白のスラックス。この夏用をピンカチと呼んでいた。イタリアの作曲家・プッチーニのオペラ『蝶々夫人』に登場するアメリカ海軍士官のピンカータンの名前から名付けられたと教えられた。ピンカータンは白い詰襟の制服姿である。

一年次の夏休みには淡路島の海洋実習センターでの水泳合宿があった。海の男が金槌では困ると、二時間、約8kmの遠泳が卒業の必須単位として課せられていた。一週間の合宿では連日遠泳に向けての練習が繰り返され、一日中水泳漬けであった。最終日は遠泳である。二列編隊を組んで海に入っていく。遠泳が始まると、監視船・伴走船からの太鼓の音とともに「エーンヤコーラ」の掛声が発せられる。各人はそれに和しながら、編隊を乱さぬように一掻き一蹴り泳いでいく。中間点で伴走船から飴を二粒もらう。口に入れると、それは得も言われぬ至福の味である。その後折り返して元の砂浜に辿り着く。「エーンヤコーラ」の掛声によって全体の調子が統制される。逆に各人はそれに和して発声することで、自身の苦しさに耐えることができる。遠泳を終えた者には、「エーンヤコーラ」の掛声とともに、自身を含む皆で仕事をなし遂げた喜びと自信に満ちあふれた笑顔があった。少し大人になった気がした。

当時大学は全寮制で、水泳合宿を終えると入学後初の帰省となる。家族に制服の晴れ姿を披露したいと、多くの学生は夏用制服ピンカチを着て帰省した。水泳合宿で真っ黒に日焼けした顔に白い詰襟のピンカチは映え、誰もが見るからに凛々しく見えた。私もピンカチで帰省すると、母は「実家を離れて他人のご飯を食べると違うなあ。おとんぼでまだ子供と思っていたが、大人に見える。白い詰襟姿がそう見えるのかなあ。白い詰襟は格好いいなあ。おかえり」と予想もしない言葉で迎えてくれた。母は女性だったため海軍兵学校を諦めたぐらい海が大好きだった。それゆえ女学校に派遣されていた軍事教練の海軍将校に憧れた。女学校の卒業アルバムには白い詰襟姿の海軍将校が教練を指導している写

真がある。そして「海軍の将校さんは格好いいなあ」と憧れを共有する友人達と「碇組」という親衛隊を作った。現在のアイドルグループへの女子高生の推しと同じである。

若い時はこのような母だったが、生涯一度も沖縄には行かなかった。旅行好き、海好き、陶器好きの母に「首里城に行こう」「万座ビーチで泳ごう」「壺屋焼の窯元に行こう」といくら誘っても行かなかった。「沖縄には戦争遺産が沢山ある。その一つにひめゆりの塔がある。私は私と同年代のひめゆり学徒隊が沖縄戦で生死を賭けて頑張っていたことを戦後になって初めて知った。戦時中の私は悲惨な戦場すら想像できずに、女学校で海軍の親衛隊を作ったり、和歌山大空襲で和歌山城が大炎上する様を数十キロ離れた実家から眺めていた田舎の女学生だった。大本営発表で日本は勝っていると思い込んでいた自分が恥ずかしいし、学徒隊に申し訳ない気持ちで沖縄を楽しめないと思う。ごめんね。沖縄はあかんねん」さらに母は広島や長崎の原爆資料館などの戦争遺産にも行かなかった。

母は最晩年に江田島の旧海軍兵学校を訪ねた。「戦時中や戦後の色々なことを想うと、ここに来る勇気がなかった。戦後六十年経ち、沖縄や原爆資料館はまだあかんけど、やっとここには来てもええかなと思うようになった。私が男性でここに入学出来ていたら、我身は海の藻屑と散っていたやろな。戦争で多くの若者が犠牲になった」と言った。教育参考館あの海軍将校を探してもらった。彼は軍事教練の指導士官を終えた後、潜水艦勤務となり、瀬戸内海での訓練中の事故で亡くなっていた。母は彼の遺影を見て「いま見ると余り男前と違うなあ」と言ったり頭を垂れていた。それ以降寡黙になり江田島を離れた。母の戦争がやっと終わった。

私が商船大学に入学した時、女学校時代の「碇組」の友人から「商船大学と海軍兵学校は違うけど、海が好きだったミーちゃん（母の愛称）の夢を息子さんが叶えてくれたね」と言われ、「そうかなあ」と、はにかんだ顔で答えたという。

戦後八十年、大学入学から五十年、母が亡くなってから十七年、私のピンカチはいつも物置の衣装ケースの中で鎮座します。